

「ローン生化学」

J. David Rawn 著

監訳 長野 敬・吉田賢右

この訳書は正統派の生化学教科書で、内容は1. はじめに、2. タンパク質の構造と機能、3. 代謝とエネルギー生産、4. 脂質・アミノ酸・ヌクレオチド合成、5. 遺伝子発現の流れ、6. 細胞の分子生物学の6部からなる。一般生化学の入門書でありながら記述はかなり詳細で、1章の細胞、2章の水の生化学構造から説き起こして33章の収縮性タンパク質に至る1150ページの大著である。しかし多色刷りの図が多くて読みやすい。有機化学を習った学生を前提にしているので、あくまでも物質を基盤として構造式を多く用い、反応図には有機電子論による解説があるのも類書に例を見ない。

原書を読むのが理想のようにみえるが、優秀な医大でも欧文の教科書が定着した例はない。逆に多数の後進国が大学で原書を用い、そのために科学技術の国民への定着が困難になっている現実をみると、日本の生化学教育での訳書の役割の大きさがわかるのである。このために日本生化学会の教育委員会が制定した生化学用語辞典を基本として、本書が明快な翻訳を行ったことは特筆に値しよう。

実は訳者の大半は私の教室に出入りしている顔なじみで、貴重な研究

時間の合間に翻訳していた。分厚い本を手にして「そうか、とうとう完成したのか」と微笑んだのである。

1人の著者が書いた本はそれなりに読みやすい。懐かしいボールドウィンの『動的生化学』に始まり、ストライヤーの『生化学』に至る一般生化学の名著の列に、De Duveの言うように本書も加わるのではないだろうか。

無論、どのような名著でも今日の広汎な生化学の全領域を網羅することはできない。国際誌のEditorとして文字どおり毎日のように若い研究者の原稿に目を通して私から見ると記憶、発生、免疫など第一線の分子生物学の記述がなく、癌の記述も乏しいが、これらは専門の総説誌で補えばよい。また医学生にとっては、臨床生化学の分析値や症状と生化学の知見との関連が欠けており、輸液の基礎となる電解質代謝なども別の本に頼るほかはない。米国では4年制大学で一般生化学を習い、その後に医大に入学する点で日本とは異なるので、本書の詳細は授業できない。

多種類の生化学の本が出ることは決してむだでなく、良いことである。特に一般生化学のように、普遍的原理を基礎とする雑誌や教科書に

は国境がないはずである。数年前ソ連に行き、大学で用いられる唯一の生化学教科書が偉大な自国の学者の肖像入りの愛国主義に貫かれているのに驚いた。町の車も旧式のボルガに統制されていた。日本なら何もブルーバードやカローラに遠慮することはない。個性に応じて好きな内外の教科書を買えばよく、著者や訳者は競って名著を目指して努力することで生化学の教育も改善される。

出版社の努力も多ししたい。訳書は原著と全く同じページに、しかも同じ位置に図、表がある。私はこのような例を対訳以外に知らない。生化学では論文を読むにも書くにも英語が必須なのだから、セミナーや勉強会などでは本書が一番便利ではないかと思われる。多数の色刷りの立体図がコンピューター・グラフィックスで描かれていて、それを見る両眼レンズまで付いている。リボゾームなどの形は類書の中で本書の図が一番本物に近いと思う。「私の歌集を出してやろうだなんて、そんな良心的なこと？をして……この会社、つぶれるんじゃないだろうか」と佐万智さんが『サラダ記念日』に書いている。無論、これは杞憂であって彼女の歌集は一世を風靡するベストセラーとなった。この良心的な本もよく読まれることを期待したい。

(自治医科大学教授・第1生化学)
香川 靖雄

●A4変型 1,200頁
定価 16,480円(税込) 送料 400円

医学書院 刊 ☎ 03-3817-5657